

で美しく出来上つた繭を、やがては絲にしてそなたの祝衣になどお喜びで有たが噫何事も夢、誰かその繭が金にかへられて御身を葬る費用にならうとはおもひかけやうぞ、實に母君は年來の心勞にいたく健康を害したのが、此時一時に發し、ふと床に就かれたのが重つて、四十三歳を一期に遂にかへらぬ人となられたのである、慈愛深きその面影を一葉の寫真にとりて。

噫なつかしき母君よ、今一度わが頭を撫でて下さうなつたと云つて欲しい、母君眠いと膝に甘へてみたい、子供らしいと笑はるゝであらうか、われは子供にかへりたいのである、母君の此世に居られた子供の時に歸りたいのである、なまじ年を重ねて細さに嘗むる世の人の、辛き情をうらみわびては袖に涙の、かゝる時母君の在さばど、千

年みるとも物いはぬ寫真を抱いて夕日沈む野邊にイむだとも幾度か。綿々として千秋つきやらぬ別恨は風朝雨夜、紀念の寫真にそゝ涙年毎に増りてあゝ今になほ兒女の愁にかへりて慟哭を禁ずるをえなさぬ。柀の露の一雫、硯にうけてかきつくるはかなしぐさも、せめては心やりのすさびて有る。

細川忠興夫人

東京 森岡 たけ子

身を守るごと、雪中を犯して清香を放つ梅花のごとく、霜雪を凌ぎて其の色を改めざる松柏のごとくにして、節操堅固なる大丈夫も及ぶべからず。我國貞女烈婦も數多ある中に、わけて、芳名高きは誰ぞや、細川忠興の夫人こそ、眞に其人なれ。

いまいさゝか、夫人の行ひさまにつきて述ふるところあらんとす。

さて、夫人は明智光秀の女にして、細川氏に嫁し其室となるや、家を守りて夫に内顧の憂なからしめ、老を老とし、幼をたづさへ、其道を露わやまることなかりき。

かの石田三成の衆、邸を數重にかこみて矢砲は競發するまゝに、夫人は日頃敬ひ仕ふる老母をして難を避けしめ、且かなしくせる兩人の兒等をよび、その頭をなで、「汝等よく我言をつゝしみて聞けよ武士の家に生れたらんには事にあたりて死すべし。死せざればかへりて辱を受く。今敵已に迫れり。吾汝等と共に死せんとす。汝等怖るゝなかれ、いとねもごろにさとし、やかて匕首を抜き、これをさし殺せり。時に男の子は僅に十歳

にして、女子は八歳なり。又侍女に命じて暑衣を取らしめ、面をつゝみていはく、婦は夫婦にあらざれば人をして顔を見せしむべからずと忽ち自殺す。其臣松齋火を放ちて、邸を焼き、乳母二人と侍女は盛炎中に投死し、從臣もまた自殺す、三成これをきゝて、おどろき、おもへらく諸侯の夫人をかくのこどくならんには是れ徳川氏のために諸侯をかりて之に歸せしむるなりと、事遂に止むを得、從て列侯の夫人も免るゝことを得たり。忠興變をきゝ、又其絶命の詞を見てかなしみ憤ること甚し。遂に東照公に從ひ先鋒となり、三成と關原に戦ひ、大にこれを敗る。東照公其功を歎賞し、熊本五十万石にまじ封じたまひき、これ唯忠興の功ありしのみならず、夫人の死節の烈の高かりしによれるなるべし、あゝこの夫人の節義と、夫人の

貞操の高きと世の人のもてはやしてやまざるもまた宜なる哉宜なる哉。

蘆湖紀行

東京和歌子

地圖を披きて箱根山頂に蘆湖あるを見、寫真石版を見て、芙蓉の峯の湖上に倒立せるこれぞ箱根の倒富士よ、など人の語るを聞くごとに、いかで一度はかゝる勝をたづねばや、とはこれのれ年頃の願なりき。さるを今年の夏うれしくも其望はみたされぬ。いでや蘆の湖のために其勝を語らんか。

八月そのの日、朝どく起きいで、登山の用意し、七時同行五人と共に箱根底倉なるやどり梅屋をいづ。駕に乗りてなり。生れてはじめてかごといふものに乗るこゝち、めづらしくおもしろし。宿の

主人どかごやより懇にのりかたを教へられて、からうじてかゝみ入る。友はと見ればはやらたくみに乗りて、かつぎ上げられたり。れもはず顔打見合して笑ふほど、これの駕も宙に上りぬ。かくて六挺の駕は一すぢになりて蘆湖に向ふ。かごや、けふは雨ならん、などいふに、箱根の山奥に雨にあふ又れもしろからずや、などいひひくゆられくゝて行く。進むに従て霧起る。雑木の繁茂せる坂路を登り行くこと、十餘丁にして小湧谷をよぎる。こゝは七湯以外の新温泉場にして、海面をぬくこと凡そ一千七百四十尺といふ。

小湧谷を経て進む行くに、道いよゝけはしく霧ますます深し。登るに従て暑さを忘る。げに箱根八里の歌にあるがごとく、雲は山をめぐり、霧は谷をどざし、羊腸の小徑は苔滑なり。いはゆる